



## タンチョウ博士のお話（第15回）

### ○タンチョウに何が起きているのだろう —タンチョウの現状と課題—

タンチョウは、江戸時代に関東地方でも冬には見かけるトリだった。有名な安藤広重も版画に描いたし、殿様の行う鷹狩<sup>たかがり</sup>の獲物や、庶民の密猟の対象にもなり、わりと身近な生きものだった。

ところが、江戸も後期（1820年ころ）になると、湿地の水田開発や狩猟などの影響で、本州ではまれなトリになってしまう。にもかかわらず、北海道では1876（明治9）年に札幌と根室だけで、18羽もタンチョウを捕ったという。ちなみに、この年はクラーク先生で有名な、札幌農学校創立の年である。

しかも、1880年代からは、タンチョウの住みかの石狩平野で、急速に水田開発が行われ、長沼町でも1888年に初めてコメが収穫された。こんな具合に、繁殖地の消失と狩猟で、まもなく北海道でもタンチョウを目にする事はなくなった。

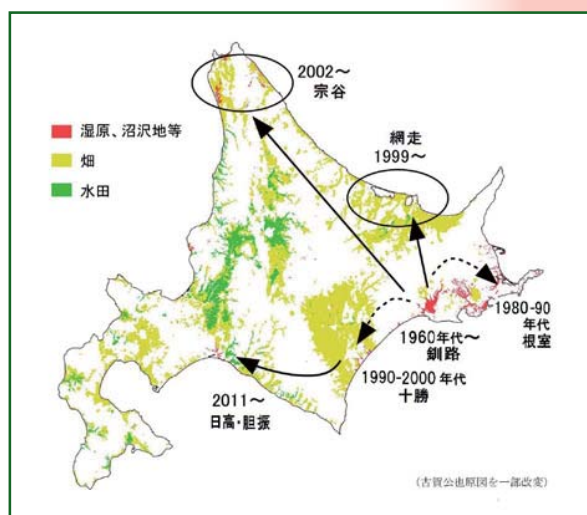
インターネットなどが未発達<sup>ひとざと</sup>の当時、噂も目撃情報もないので、タンチョウは絶滅<sup>しんぼうつよ</sup>したと思う学者がいたのも仕方ない。ところがどっこい、タンチョウは人里離れた道東の湿地で、辛抱強く生き残っていた。その数わずか数十羽で、発見<sup>おおやけ</sup>が公にされたのは1926（大正15）年、今から92年前のことだ。

その後、ヒトは保護に力を注ぎ、タンチョウもヒトに慣れ、与えられた餌を食べ、体力をつけて数を急激に増し、今はおよそ1,800羽。なのに、生息地をヒトは畑や水田・工業用地・住宅地などに変えてしまい、たとえば石狩平野では大正時代と比べ湿地の99.2%が失われたという。

ところで、空のコップでも水を注ぎ続けると、やがてあふれる。あふれた水は、低いところへ流れる。それと同じことが、タンチョウでも起きた。つまり、羽数が増えたため、混み合った道東で住み場を確保しにくくなったタンチョウが、今世紀に入り道北や道央へ進出し始めたのである（図1）。

この現象は、歓迎すべき面も持っている。なぜなら、多いときは300羽以上が狭いひとつの餌場へ集まる道東のタンチョウで、もし感染<sup>かんせんしやう</sup>症、たとえばニワトリで起きる高病原性鳥インフルエンザ<sup>こうびやうげんせい</sup>などが発生したら、まさにひとたまりもない。その危機を回避する手立てとして、過度の集中を抑え、離れたところに分散した群れをつくるのが急がれているからだ。

しかし、あふれていく先の入れ物の大きさは、さほどあると思えないのが問題だ。また、道東では、冬に餌場に集中するタンチョウを分散させるため、与える餌量を減らし始めたが、果たして望ましい結果になるのか、疑問の声もある。（文：正富宏之）



【図1】各地方において、タンチョウ営巣番いが増えた期間や、新たに出現した年。（例えば、釧路地方では1960年代から増え続けているが、根室地方は1980～90年代に増えたものの、今はほとんど増えていない。）